

タマネギ新品種「もみじの輝」の安定生産にはは種時期が重要

6月上旬どり長期貯蔵用の新品種「もみじの輝」は、収穫時期の降雨や田植え作業との競合が回避できる一方で、抽苔や分球が発生しやすい問題があり、これを解決するための栽培方法について検討した。その結果、は種を慣行の種時期よりも遅らせ、10月上旬とすることで抽苔、分球の発生の危険性が少なく、収量性も確保できることが分かった。

内容

は種時期を6回に分け(表)、地床育苗後、標準植えの12月17日に定植し、これに本田施肥の標準肥(窒素20kg/10畝)、多肥(窒素30kg/10畝)を組み合わせ、は種時期等が抽苔、分球、の発生及び収量に与える影響を検討した。

は種日と植え付け時期の違いによる収量(標準肥)

	は種日	標準植え (12/17)	早植え (12/2)	遅植え (1/5)
慣行	9/29	5.7ト _ン	6.0ト _ン	6.2ト _ン
早播き	9/21	5.6ト _ン		
遅播き	10/5	5.8ト _ン		
	10/9	5.1ト _ン	6.3ト _ン	5.9ト _ン
	10/15	4.7ト _ン		
	10/19	3.8ト _ン		

苗は、すべて地床育苗のものを使用

その結果、10月5日以降のは種では抽苔、分球の発生はほとんど見られなかった(図1)。また、10畝当たり収量は10月5日は種で慣行と同等の収量が得られた(表)。

さらに慣行は種と遅播き(10月9日)の苗を用い、早植え(12月2日)、遅植え(1月5日)の影響について検討した(表)。その結果、10月9日は種で、

定植時期にかかわらず、抽苔、分球の発生は見られなかった(図2)。また、このときの早植え、遅植えの10畝当たり収量は、それぞれ標準植えよりも多収であった(表)。

「もみじの輝」の抽苔、分球は、従来品種の慣行は種時期よりも遅くすることで発生が少なくなり、また、このときに多肥や早植えなど初期生育が進み過ぎる条件が加わっても安定して抽苔、分球の発生が抑えられた。

以上から、収量性が確保でき、抽苔、分球の発生を回避する最も有効な対策として、10月上旬のは種が望ましいと考えられた。なお、年次による気象変動に対応できるよう、施肥量の遵守、また、暖冬が予想される場合には早植えを控えるなど、総合的な対策が必要である。

今後の方針

今回の試験データを基に、JA、普及センター等の指導機関との連携を図り、新品種の安定生産、栽培定着に向けた技術として現地指導に反映させる。

西野 勝(淡路農技 農業部)

(問い合わせ先 電話: 0799-42-4800)

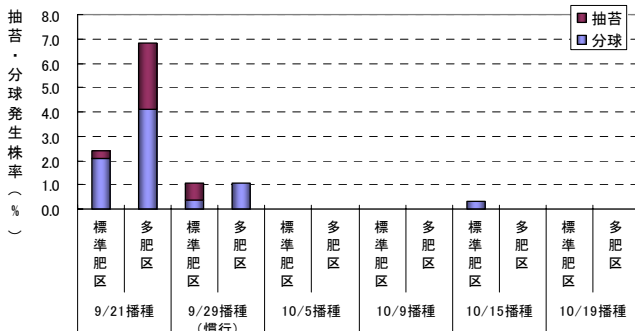


図1 播種時期、施肥量が「もみじの輝」の抽苔、分球の発生に与える影響(2010年産)

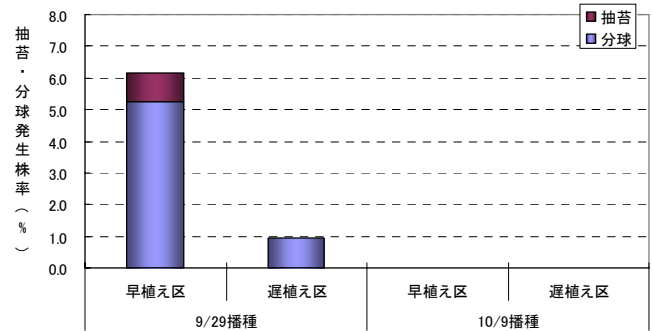


図2 播種時期、定植時期が「もみじの輝」の抽苔、分球の発生に与える影響(2010年産)